

アレクサンダー・クリッヒエル

Alexander Krichel

●ピアノ

取材・文=中 東生

3Dのような映像的なラヴェル 聴衆の心に触れる演奏を



■公演情報

○アレクサンダー・クリッヒエル ピアノ・リサイタル《日時・会場》11月25日14時・兵庫県立芸術文化センター 神戸女学院小ホール／12月2日15時・三鷹市芸術文化センター 風のホール《曲目》ラヴェル《夜のガスパール》、ムソルグスキー《展覧会の絵》、他《問合せ》芸術文化センター チケットオフィス0798・68・0255（11月25日）／三鷹市芸術文化センター チケットカウンター0422・47・5122（12月2日）
※他にも12月4日に協奏曲あり。

アレクサンダー・クリッヒエルが、12月に発表して以来、多くの批評家に絶賛されている最新CD（鏡、ラヴェル・ピアノ作品集）のレバートリーを携えて、11月から12月にかけて再来日する。彼の、旋律を歌わせるエネルギーは聴く者を惹きつけるのだ。最新CDには別世界のラヴェルを選んだ。

「ラヴェルはミステリアスな世界を持っています。そんな彼の音楽を弾くには、さまざまなアプローチの方法がありますが、個人的には、適した響きを探さずに弾くピアノリストは好きになれません。最大の響き、最小の響きまで駆使し、最小の時でも存在感は失ってはならないのです」

彼の構築するラヴェルの世界が「絵画的」なのを越えて、「映像的」なのは、そのような響きによって描かれる、いわば3Dのような演奏だからなのだろう。5月には出身地ハンブルクに新しく建った「音楽の殿堂」エルプフィルハーモニーの小ホールでもリサイタルを開き、大成を取め、来年は大ホールでのラフマニノフ・コンサートへと飛躍する。

幼少のころ、注意欠如・多動性障

害（ADHD）を疑われるほど扱いが難しかったアレクサンダー少年に、親がセラピイのつもりで始めさせたというピアノが、偶然にも彼の天職だった。数学オリンピックに出場したり、周りから医者になることを期待されるような秀才だったが、自分のやりたいことは音楽しかない、と冒険に挑んだ。両親はハノーヴァー音楽大学で教えていたウラディミール・クライネフに「採ってもらえる（師事することができ）のなら許す」と条件を出し、800人の応募者から選ばれたのだった。

このCDの中のラヴェル《鏡》は17歳の時に初めて弾いた。先生が「ピアノ曲の中でもっとも難しい」とコメントしたものの、2週間後には完成したという。その時から好きだったラヴェルをやっと自分のものとして録音する準備が整ったと感じたのだという。「でも、いちばん難しいからといって、聴衆をいちばん感動させられるとは限りません。僕は聴衆を感心させたいのではなく、聴衆の心に触れたいのです」

今年も琴線に触れて来るだろうクリッヒエルの来日が楽しみだ。